



皮膚科診療で「得意分野」をつくりましょう

三石 剛

さいたま赤十字病院皮膚科部長

私は卒後すぐに東京女子医科大学皮膚科に入局しました。研修医2年目のある日、上司から「HPVの研究をやらないか？」という話があり、願ってもない機会と思い、二つ返事で学ぶこととなりました。当時、国立感染症研究所が大学病院の近くに移転してきたため、上司からの紹介でウイルス・感染病理部の研究室に出入りする機会が得られたのは幸運でした。また約2年の基礎・臨床研究で学位論文を書き上げることとなりました。

その後「海外で研究をしよう」と思っていたところ、豪州の国際学会で当時のドイツのボスとお会いして、ドイツでの基礎研究の機会を得ることになりました。留学前までは凍結組織検体の材料を集めて基礎・臨床研究の準備をしていたことが後々、重要であったように思います。学位取得後、すぐに検体を持参してドイツ癌研究センターを訪れ、研究が始まりました。

しかしリサーチ不足であったのは歪めず、ラボでの研究内容は日本の感染研で行っていたこととほぼ同じで、アイソトープを用いた基礎研究が若干違っていたことくらいです。隣のラボには世界的に有名なSheffner先生がおり、「隣りで研究やりたいなあ〜」とラボの同僚と話していたほどです。

ともあれせっかくドイツに来たのだから、その文化を楽しみながら研究を行っていこうと気持ちを切り替え、約2年を過ごしました。帰国後、ご縁があって日本医科大学皮膚科へ異動となり、着任

後、上司にはまず「何か専門外来を行ってください」といわれました。約4年、HPVの基礎研究を行ってきたのだから疣贅の診断・治療についてはうまく応用できるだろうと考え、週に1回いぼ専門外来を始めました。難治性疣贅の患者さんがかなり来院していましたが、液体窒素での治療だけでなく、いろんな治療を重ねたり、試みた結果、疣贅について悩んできた多くの患者さんから「こんなに綺麗にしてくださいありがとうございます」「もっと早くこの病院に来ればよかったです」などの嬉しい言葉をかけていただいたのを鮮明に覚えています。すべての基礎・臨床研究は診療に必ず役立つものと理解しています。

さてスポーツ観戦の好きな私はシーズン中であるMLBやNBAの結果をチェックしております。千賀滉大選手の「お化けフォーク」や大谷翔平選手の「スーパースター」はMLBのトップクラスの選手でもなかなか打てません。またいまは亡きアントニオ猪木さんが現役のころ「延髄斬り」「卍固め」などを必殺技にしていたことは記憶に残っています。たとえが悪いかもしれませんが、こういったほかの人が真似しにくい「得意分野」をもつこと。〇〇という皮膚疾患は〇〇先生の専門だといわれるような、何か突出した専門分野を取得することは重要です。これから基礎・臨床研究に取り組みたいと考えておられる先生はぜひ、皮膚科診療で「得意分野」をつくりましょうというのが私のメッセージです。